

聞く工夫 2021. 10. 21

「組織のトップの人達は、その組織の中の人達の声聞くことが大切である」と言ったことは、いまさら話す必要もないと思います。

私が新見公立短期大学の学長に赴任して、まずは、学生といろいろ話をしてみたいと計画しました。そこで、看護学科、幼児教育学科、地域福祉学科の各クラスから毎週1名が参加して昼飯を食べながら話していれば、学生の考えや大学に対しての要望のようなことも聞けるのではないかと期待しました。でも、失敗でした。

失敗の原因は、学生達に会話力がないことです。私が一方的に、所属学科や名前を聞いたり、出身地を聞いたりするばかりで、彼らから話題が出ることはほとんどないのです。さっぱり面白くありません。この昼食会は、胃の調子が悪くなりそうで3か月ほどで止めました。

会話は、平生から周囲の事柄に対して、細かい観察や問題意識をもち、考えていなければ、出来ないのではないかと思います。学生たちの大学に入るまでの教育は、ひたすら覚えるだけの受験勉強で、考える教育が軽視されているのではないかと痛感しました。また、スマホなどから簡単に得られる知識も受動的で、現在、「考える教育」が盛んに言われていますが、現場ではどうなのでしょう。

その後、私は少し良さそうなことを思い付きました。それは、大学の学生食堂に昼食に行き、学生たちが座っているテーブルに割り込んで座り、話をするということです。学生には学長と一緒にということで歓迎されます。多くの場合、学生達は親しい者同士がグループになって食べていますので、そこでは会話が弾んでいます。学生達の話聞きながら私も口をはさみます。そのような雰囲気から、学長室に話をしに行ってもいいかと言いつつ学生もいます。

現在、「私物化される国公立大学」(駒込武編、岩波書店、2021)が出ています。それは、学長や副学長などのトップが、現場の教職員の意向を無視しているからです。トップの聞く力と聞く工夫がないのです。如何に聞くかは難しいことです。

エコノミストのドラガーは、「聞くことの大切さは言われぬことを聞くことだ」と言っています。